

幼稚園教諭の感じる「気になる」幼児

國井睦美*・松村多美恵**

(2008年6月30日受理)

Infants Worried by Kindergarten Teachers

Mutsumi KUNII and Tamie MATSUMURA

キーワード: 幼稚園教諭, 「気になる」幼児, アンケート調査, 事例報告

本研究は、幼稚園教諭が一般的な「気になる」幼児に対してどのようなイメージを持っているのか、どのような特徴を気になると感じているのかについて検討するとともに、保育経験や幼稚園における役割、担当クラス、障害児担当経験の有無などと、「気になる」幼児のイメージや特徴との関連について、アンケート調査および事例報告レポートの分析により検討した。

アンケート調査の結果、「気になる」幼児として、「診断はないが、障害があると思われる幼児」であるとイメージしている幼稚園教諭が一番多く、これについては勤務園の種類、園での役割、障害児担当経験の有無などによる違いはみられなかった。「気になる」幼児の特徴として一番多かったのは、「多動・衝動的」、二番目は「コミュニケーション」、三番目は「身辺自立」であった。事例報告レポートの分析においても同様の結果が得られた。

はじめに

近年、健常児とされる子どもの中に「気になる」子どもとして保育に困難性を感じる子どもが多数在園している。伊藤ほか(2001)は、保育所・幼稚園の園長や主任などベテラン保育者の意識を尋ねた結果、「ここ数年気になる子どもが増えたと感じるか」に関して、「大変増えたと思う」、「若干増えたと思う」双方合わせて94%であることが明らかにしている。また、本郷ほか(2003)の保育所における「気になる」子どもの調査研究では、61ヶ所の保育所のうち58ヶ所の保育所に「気になる」子どもが在籍していることを指摘している。

ところで「気になる」幼児のイメージや特徴の捉え方は、保育者の保育経験やそれまでの担当学年などの違いによって異なるのではないだろうか。井口(2000)は幼稚園と保育所に勤務する保育者

*西那須野幼稚園 **茨城大学教育学部

を対象としてアンケート調査を実施し、「気になる」子どもの有無の回答傾向を保育経験別、幼稚園・保育所の違い、地域別、クラス別、クラス規模などの条件別に検討している。しかし、「気になる」子どもの特徴と保育者の属性との関係については検討していない。

そこで、本研究では、幼稚園教諭が一般的な「気になる」幼児に対してどのようなイメージをもっているか、どのような特徴を気になると感じているのかについて検討する。さらに、それらの幼稚園教諭の意識は、保育経験年数や幼稚園での役割、担当クラス、障害児担当経験の有無などによって影響を受けるかいなかも検討する。

方法

1. 「気になる」幼児に関するアンケート調査

(1) 調査対象および手続き

2007年度I県保育技術協議会に参加した幼稚園教諭(88名)に、「気になる」幼児に関する調査用紙を配布し、その場で回答を記入してもらい回収した。なお、この協議会にはI県の各幼稚園より1名ずつ教諭が参加している。

(2) 調査項目

○教諭自身について

- ① 保育経験年数
- ② 勤務園(市町村立幼稚園, 国・私立幼稚園, 盲・聾学校幼稚部)
- ③ 幼稚園内での役割(通常学級担任, 通級学級担任, 担任外)
- ④ 担当クラス(3, 4, 5歳児クラス担任, 混合クラス担任, 担任外)
- ⑤ 担当クラス経験(3, 4, 5歳児クラス, 混合クラス, 通級学級担任)
- ⑥ 障害児担当経験の有無

○担当クラスの幼児について

- ① クラスの人数
- ② クラス内の障害児の人数
- ③ 療育や他機関での個別指導を受けたことのある幼児, また受けている幼児の人数
- ④ 「気になる」幼児の人数

○「気になる」幼児について

- ① 一般的な「気になる」幼児に対するイメージ
以下の4タイプの幼児について「気になる」順番をつける。
 - (a) 障害と診断された幼児
 - (b) 障害と診断されていないが障害があると思われる幼児
 - (c) 障害はないと思われるが家庭環境(虐待, 生活リズムの乱れ, 保護者の養育姿勢など)の影響があると思われる幼児
 - (d) 障害がないと思われる, かつ家庭環境に問題もないが, 「気になる」特徴のある幼児
- ② 「気になる」幼児の特徴
以下の11項目の中から3項目選び, 「気になる」順番をつける。

- ア) 身辺自立, (イ) ことばの表現, (ウ) 指示理解, (エ) 粗大運動・微細運動, (オ) コミュニケーション, (カ) 集団参加, (キ) こだわり, (ク) 不注意, (ケ) 多動・衝動的, (コ) 感覚過敏, (カ) その他

2. レポートの分析

2006年度I県保育技術協議会(「気になる幼児」の配慮と支援)のレポート(担任しているクラスの中で「気になる」幼児を一事例あげ、その特徴を記述したものを)を基に、幼稚園教諭が「気になる」幼児の特徴について分析する。各レポートにおいてキーワードを抜き出し、それらを12のカテゴリのうち該当するカテゴリに分類した。12のカテゴリについては、本郷(2003)、井口(2000)およびI県の「幼児の気になる行動確認マニュアル」を参考にして設定した。具体的には、「身辺自立」、「ことばの表現」、「指示理解」、「粗大運動・微細運動」、「コミュニケーション」、「社会性(集団参加)」、「こだわり」、「多動・衝動性」、「不注意」、「感覚過敏」、「情緒的不安」、および「その他」である。

結果および考察

1. アンケート調査の結果

未記入および不明な項目の多い2名の回答を除き、88人の回答を分析対象とした。

(1) 保育経験年数

表1は、対象とした幼稚園教諭の保育経験年数を示している。5年以内の教諭は、全体の5%と少なく、5～10年および10～15年の教諭は20%台と多いことがわかる。15年以上の教諭はそれぞれ10%台であり、全体の約1割ずつである。

表1 保育経験年数

	1年未満	1～5	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30年以上	合計
人数(人)	3	2	18	21	13	9	11	11	88
割合	3%	2%	20%	24%	15%	10%	13%	13%	100%

(2) 勤務園

市町村立幼稚園教諭69人、国・私立幼稚園教諭18人、盲・聾学校幼稚部教諭1人であった。

(3) 勤務園での役割

通常学級担任73人、通級学級担任1人、担任外14人であった。通級学級担任については、保護者と一緒に週1回通園している未就園児の学級担任であった。担任外の中には、「教育相談員」との記入も見られた。

(4) 担当クラス

表2は現在の担当クラスと経験したことのあるクラスについて示す。3歳児クラスを担当している教諭は16人、4歳児クラス26人、5歳児クラス27人、混合クラス5人、担任外14人であった。4歳・5歳児クラス担当が多く、全体の61%を占めている。

(5) 経験担当クラス

これまで担当したクラス全てを記入してもらった(複数回答)。3歳児クラスを担当したことのある教諭は全体の55%であり、4歳児クラス担当の経験は全体の95%、5歳児クラスについては89%と、ほとんどの教諭が4歳児クラスと5歳児クラスの担当経験があると言える。

表2 担当クラス・経験担当クラス

		3歳	4歳	5歳	混合	担任外	通級	合計
担当 クラス	人数	16	26	27	5	14	0	88
	割合	18%	30%	31%	6%	16%	0%	100%
経験担当 クラス	人数	48	84	78	20		5	
	割合	55%	95%	89%	23%		6%	

(6) 障害児担当経験の有無

これまでに障害と診断された幼児を担当したことがあるか否かについて質問したところ、68人(77%)の教諭が障害児を担当したことがあると答えている。

(7) 「気になる」幼児の人数

担任教諭に「気になる」幼児の人数を尋ねた結果、「1人」と答えた教諭:24人、「2人」:24人、「3人」:10人、「4人」:1人、「5人」:2人、「6人」:1人であった。「気になる」幼児が、1人または2人在籍すると答えた教諭が回答した教諭の約80%であり、平均1.96人であった。

(8) 一般的な「気になる」幼児に対するイメージ

一般に「気になる」幼児と聞いたとき、教諭がどのような幼児を想定するのか、(a)障害と診断された幼児、(b)障害と診断されてはいないが障害があると思われる幼児、(c)障害はないと思われるが家庭環境(虐待、生活リズムの乱れ、保護者の養育姿勢など)の影響があると思われる幼児、(d)障害がないと思われる、かつ家庭環境に問題もないが「気になる」特徴のある幼児、の4項目(以下(a)(c)(c)(d)で表す)について、教諭の考えに近いものから順番に1, 2, 3, 4の数字を記入してもらった。未記入および不明な点の多い4人の回答を除き84人の回答を分析対象とした。1番目に気になるとしたものを4点、2番目を3点、3番目を2点、4番目を1点として点数化した結果、(a)162点、(b)277点、(c)244点、(d)157点であった。

表3 「気になる」幼児のイメージ得点

	1 番目	2 番目	3 番目	4 番目	得点
(a)障害と診断された幼児	14 人 (17%)	7 人 (8%)	22 人 (26%)	41 人 (49%)	162
(b)診断はないが、障害があると と思われる幼児	44 人 (52%)	25 人 (30%)	11 人 (13%)	4 人 (5%)	277
(c)家庭環境の影響がある と思われる幼児	18 人 (21%)	42 人 (50%)	22 人 (26%)	2 人 (2%)	244
(d)障害も家庭環境の影響も ないと思われるが、 気になる幼児	8 人 (10%)	10 人 (12%)	29 人 (35%)	37 人 (44%)	157

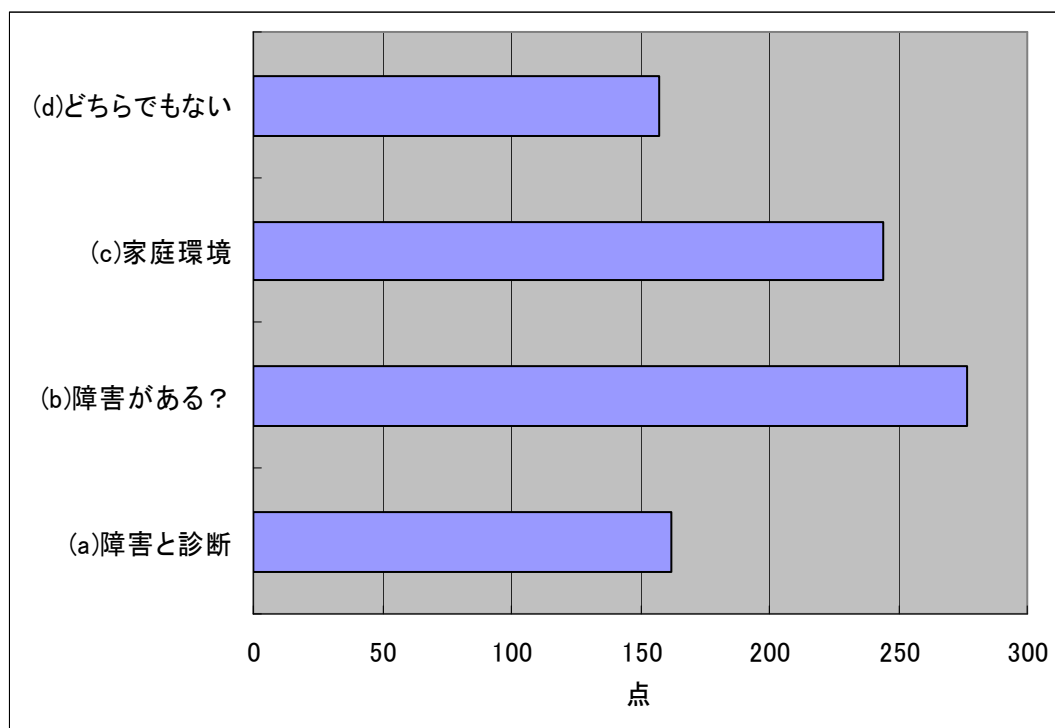


図1 「気になる」幼児のイメージ得点

表3は「気になる」幼児のイメージについての順位別人数, その比率, および点数を示す。また, 図1は全体のイメージ得点を図示したものである。表3および図1より, (b)の「診断はないが障害があると思われる幼児」を, 気になると感じている幼稚園教諭が相対的に多いことが示唆される。

勤務園別, 役割別, 担当クラス別, および障害児担当経験の有無別に「気になる」幼児のイメージについて多い順から示したのが, 表4である。教諭が1番「気になる」イメージの中で, 回答比率が高かったのは, (b)「診断はないが障害があると思われる幼児」であった。これについては勤務園, 役割, 担当クラス, および障害児担当経験の有無などによる違いは見られなかった。しかし, 2番目以降は, 担任外を除いて(c)「家庭環境の影響があると思われる幼児」, (a)「障害と診断された幼児」, (d)「障害がないと思われる, かつ家庭環境に問題もないが「気になる」特徴のある幼児」または(a), (c), (d)の順で多かった。担任外教諭は(a), (d), (c)の順であった。担任外教諭の中には相談員や介助員などが含まれ, 障害幼児や配慮を要する幼児と個別にかかわることが多いために, (a)や(d)を気になると捉える教諭が多かったのだと考えられる。回答比率で比較すると, 3歳担当教諭における(a)が低かった。発達障害児早期発見のため乳幼児健診や3歳児健診が行われていて, 3歳児健診は満3歳～満4歳の幼児が対象とされている。3年保育の年少クラスには3歳児健診を受けていない幼児も含まれ, 障害と診断されている幼児の人数自体が, 4歳児, 5歳児よりも少ないために, (b)が高く, (a)が低かったのだと考えられる。また障害児担当経験のない教諭の結果は, (c)への比率が顕著に高かった。障害児担当経験がないために「気になる」幼児を障害よりも家庭環境と結びつけるのだと考えられる。

表4 「気になる」幼児のイメージの順位

		回答者の割合	イメージの順位
全体		100%	b > c > a > d
勤務園	市町村立	79%	b > c > a > d
	国・私立	20%	b > a > c > d
役割	通常学級	83%	b > c > a > d
	担任外	15%	b > a > d > c
担当クラス	3歳児担当	18%	b > c > a > d
	4歳児担当	29%	b > c > a > d
	5歳児担当	32%	b > c = a > d
障害児担当 経験	あり	81%	b > a > c > d
	なし	19%	b > c > a > d

(9) 「気になる」幼児の特徴

障害があるかないかわからないが, 「気になる」と教諭が感じている子どもについて, 気になる特徴を, (ア)身辺自立, (イ)ことばの表現, (ウ)指示理解, (エ)粗大運動・微細運動, (オ)コミュニケーション, (カ)集団参加, (キ)こだわり, (ク)不注意, (ク)多動・衝動的, (コ)感覚過敏, (サ)その他の11項目(以

下記号のみ表記する)の中から、3項目ほど選択してもらい、「気になる」順に1, 2, 3の番号を記入してもらった。アンケート調査実施時点で、回答者がそのような子どもを担当していない場合は、日常感じている「気になる」特徴を選び、番号をつけてもらった。表5は「気になる」幼児の特徴についての順位別人数、その比率、および点数を示す。さらに、図2は、それを図示したものである。1番目に気になる特徴として回答者数が多かったのは、(ク)多動・衝動的で、(オ)コミュニケーション、(ア)身辺自立の順であった。すなわち全体として1番比率が高かったものは(ク)「多動・衝動的」、2番目は(オ)「コミュニケーション」、3番目は(ア)「身辺自立」であった。

勤務園別、役割別、担当クラス別、および障害児担当経験の有無別に「気になる」幼児の特徴として一番目に挙げられた特徴について多い順から示したのが、表6である。勤務園の比較結果では、国・私立幼稚園教諭は(イ)「ことばの表現」への回答比率が高かった。市町村立幼稚園と国・私立幼稚園の保育内容に制度上の大きな違いはないが、私立幼稚園では園独自の教育方針があり、ことばなど知育に力を入れている園も見られる。このような環境の中でことばの表現への関心が高くなると思われる。担当クラスについては年齢により異なる傾向がみられた。すなわち3歳児クラス担当教諭は、(ア)「身辺自立」、(イ)「ことばの表現」、(オ)「コミュニケーション」、(ク)「多動・衝動性」の回答比率に顕著な差異が見られず、特定の特徴が際立っているわけではないと言える。また(ウ)「指示理解」を気になるとした3歳児クラス担当教諭はいないが、4歳児、5歳児と担当クラスの年齢が上がるにつれて回答比率が高くなっている。3歳児では少数の友達とのかかわりであったのが、加齢とともに徐々に一斉活動や集団で遊ぶ機会が増え、さらに5歳児になるとルールのある遊びが導入される。そういった変化の中で、一斉への指示を理解できる幼児が増え、逆に指示理解に困難を示す幼児が目立ち、教諭の目につきやすくなるために、年齢とともに「指示理解」の困難を気になると感じる回答者が増えているのだと考えられる。また、障害児担当経験のない教諭は、障害児担当経験のある教諭より(ウ)「指示理解」への回答比率が高かった。

表5 「気になる」幼児の特徴得点

	1 番目	2 番目	3 番目	得点
(ア) 身辺自立	14 人 (16%)	6 人 (7%)	8 人 (9%)	62
(イ) ことばの表現	3 人 (3%)	8 人 (9%)	4 人 (5%)	29
(ウ) 指示理解	7 人 (8%)	15 人 (17%)	16 人 (19%)	67
(エ) 粗大運動・微細運動	0 人 (0%)	0 人 (0%)	1 人 (1%)	1
(オ) コミュニケーション	17 人 (20%)	19 人 (22%)	12 人 (14%)	101
(カ) 集団参加	8 人 (9%)	11 人 (13%)	8 人 (9%)	54
(キ) こだわり	7 人 (8%)	9 人 (10%)	21 人 (24%)	60
(ク) 不注意	1 人 (1%)	2 人 (2%)	4 人 (5%)	11
(ケ) 多動・衝動的	27 人 (31%)	16 人 (19%)	11 人 (13%)	124
(コ) 感覚過敏	1 人 (1%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	3
(サ) その他	1 人 (1%)	0 人 (0%)	1 人 (1%)	2

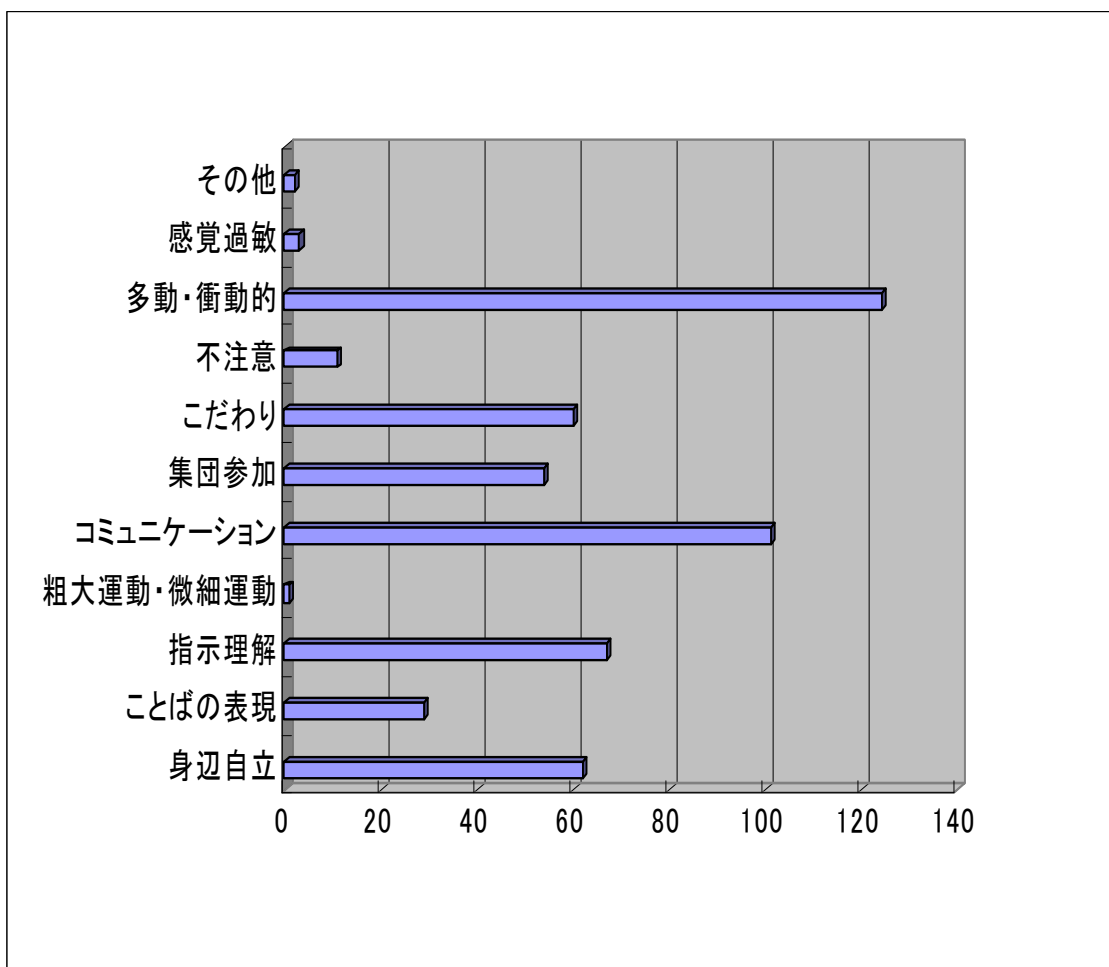


図2 「気になる」幼児の特徴得点

表6 「気になる」幼児の特徴の順位

		回答者の割合	イメージの順位
全体		100%	ケ > オ > ア
勤務園	市町村立	78%	ケ > ア > オ
	国・私立	21%	ケ > オ > イ
役割	通常学級	83%	ケ > オ > ア
	担任外	16%	オ = ケ > ア = カ
担当クラス	3歳児担当	19%	ケ > ア = イ = オ
	4歳児担当	29%	ケ > ア > ウ
	5歳児担当	30%	ケ > ウ = オ > ア
障害児担当経験	あり	77%	ケ > オ > ア
	なし	23%	ケ > ア = ウ

2. レポートの分析結果

「気になる」幼児の特徴について具体的な状況をレポートの事例で分析した結果を示したのが、図3である。特徴として多かったのは「コミュニケーション」「情緒的不安」「多動・衝動性」「集団参加」および「身辺自立」であった。「コミュニケーション」の категорияに分類されたキーワードとしては、「会話のやり取りができない」「目線が合わない」などの他に「同年齢の他児よりも大人とのかかわりを好む」「一人遊びを好み他児とかわろうとしない」などの記述が多かった。「多動・衝動性」については、本郷ら(2003)の研究による「対人的トラブル」に関する記述や「席にじっとしてられない」などの記述が多かった。

アンケート調査と比較すると「多動・衝動性」「身辺自立」「コミュニケーション」などを「気になる」特徴と捉えている教諭が多い点で共通している。相違点は、「情緒的不安」および「集団参加」への比率の違いである。「情緒的不安」については、レポート分析をするうちに10項目の中に分類できないキーワードとして「ずっと泣いている」や「登園しぶり」などが多く挙げられていたため、新たに「情緒的不安」というカテゴリーを加えた。この項目は、アンケート項目にはなかったため、アンケートの分析結果と異なった結果となった。「集団参加」については、「気になる」特徴と捉えている教諭が多いが、アンケートでは上位3項目にはほとんど含まれていない。

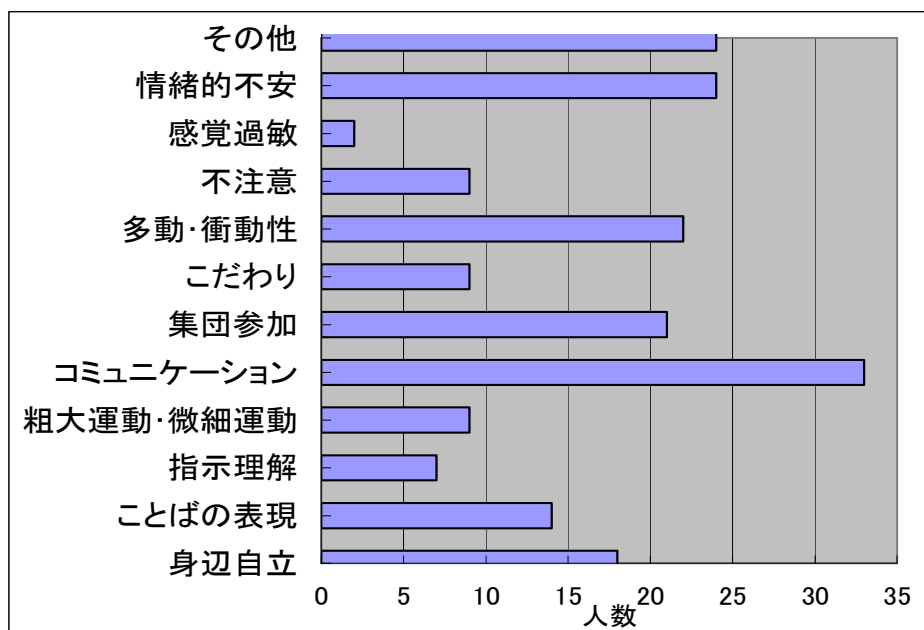


図3 レポートの事例における「気になる」幼児の特徴

引用文献

- 1) 伊藤祐子・別府悦子・西垣吉之・岡田泰子. 2001. 「幼児の心の理解をすすめる保育者養成のあり方について -幼稚園・保育所(園)における指導上『気になる子ども』に関する調査研究報告

書一」(日本私学振興財団助成)。

- 2) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子. 2003. 「保育所における『気になる』子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究」『発達障害研究』25, 50-61.
- 3) 井口均. 2000. 「保育者が問題にする『気になる子』についての傾向分析」『長崎大学教育学部紀要－教育科学－』59, 1-16..